

日本哲学プラクティス学会第1回大会

日時：2018年8月26日（日）

会場：明治大学 和泉キャンパス第一校舎 地下一階

シンポジウム（008教室）15:50～18:20

学校で哲学プラクティスを行うことの
ジレンマと可能性

報告資料について

- * 本報告資料の最終版は、以下のサイトからダウンロードできるようにします。
(<http://researchmap.jp/read0190814>)
- * 「小玉重夫 research」、あるいは、「小玉重夫 資料公開」で検索すれば出てきます。

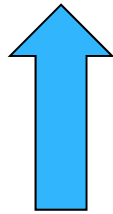
価値の注入から価値の越境へ

- * 価値を注入する徳目主義から、価値を越境する哲学対話へ
- * 幽閉された自己から解放された自己へ
- * 解放された自己の条件としての対話
- * 一者のなかの二者 アレント(小玉 2013など)
- * 答えのない問いと向き合う 「お母さんの請求書」「星野君の二塁打」
- * →お茶の水女子大付属小の試み

価値内容(徳目)

教師

学習



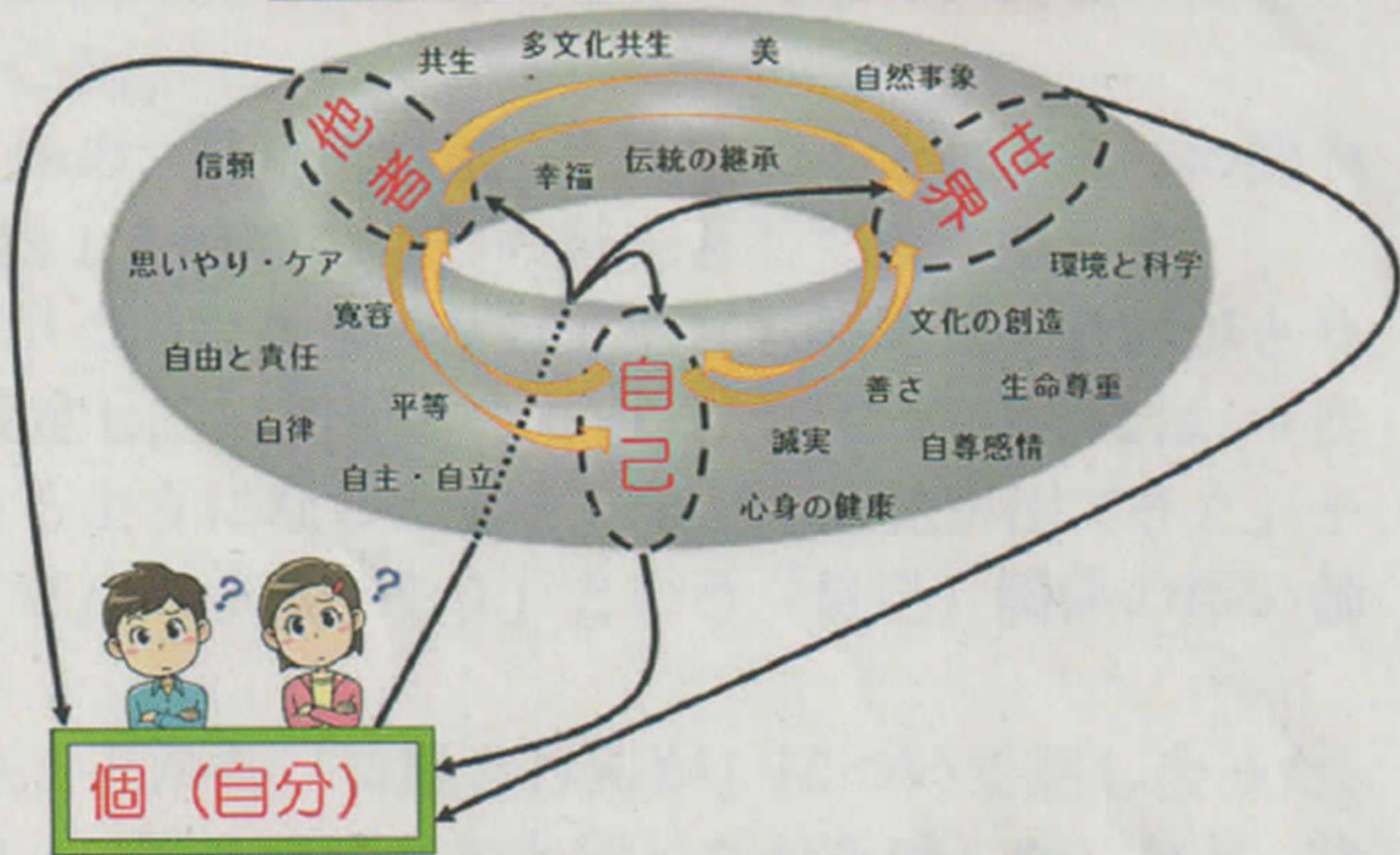
教育



児童・生徒

個(自分)

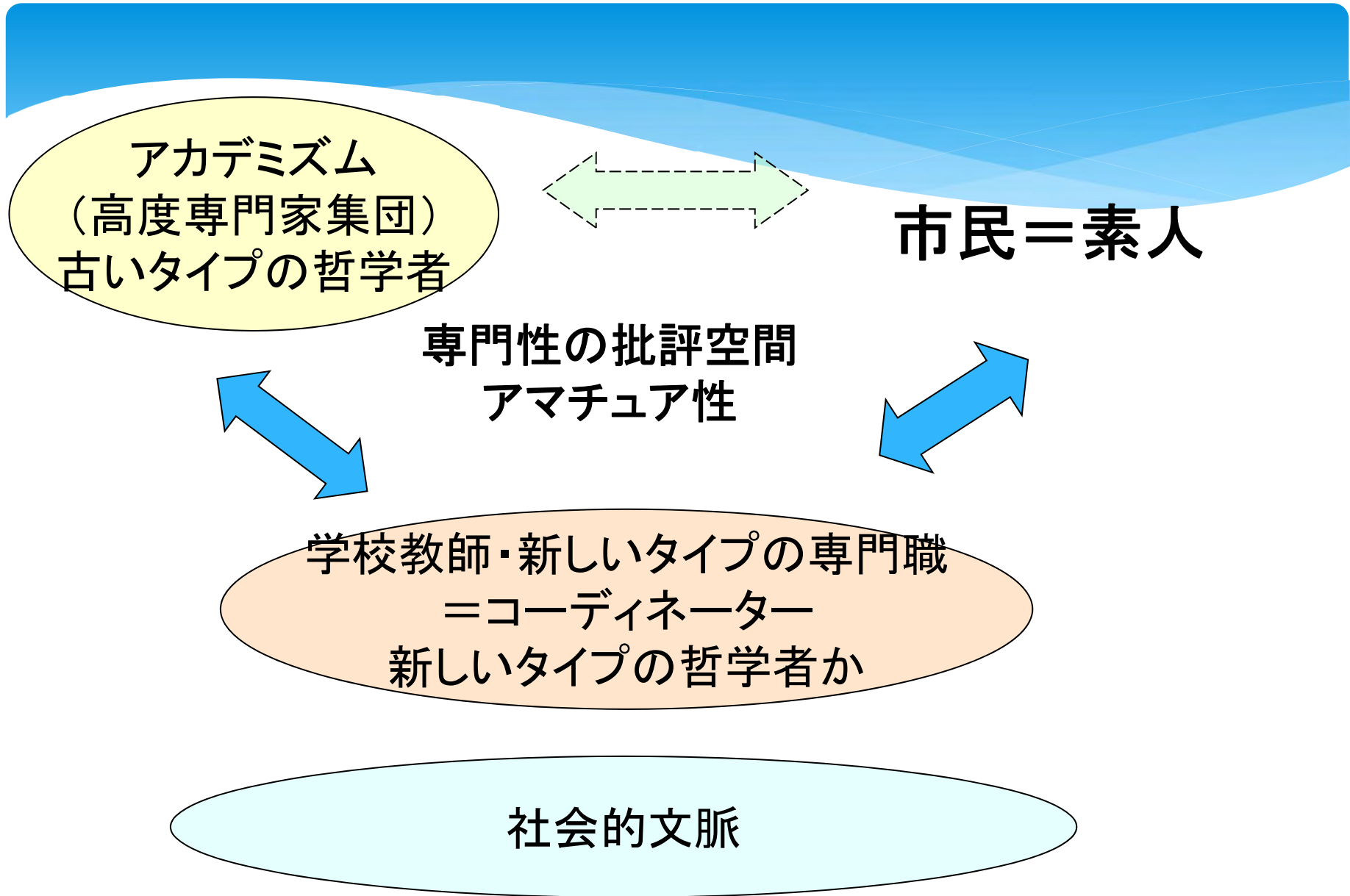
考える対象とする価値内容の例



〔図2〕 「てつがく」科で考える価値内容の例

教師像の転換

- * 「説明する」存在から「翻訳」「通訳」する存在へ(ランシエール、ビースタ)
- * 「超越する」(over) 存在から「間に立つ」(in between) 存在へ(アレント)
- * 「てつがく」から各教科への波及(シティズンシップ教育への展開) 詳しくは、小玉 2016など



アカデミズム
(高度専門家集団)
古いタイプの哲学者

市民=素人

専門性の批評空間
アマチュア性

学校教師・新しいタイプの専門職
=コーディネーター
新しいタイプの哲学者か

社会的文脈

二つのジレンマ

- * 専門性(秘儀性)と市民性(公共性)の間のジレンマ
- * 沈黙と対話の間のジレンマ

専門性(秘儀性)と市民性(公共性) の間のジレンマ

- * 「学校」という権力空間に哲学対話を導入することをめぐるジレンマ(岩瀬 2018)
- * 「学校」という権力制度と「大学」という権力制度の二つの権力制度を往還することをめぐるジレンマ

沈黙と対話の間のジレンマ

- * これまで「教科」という知の枠組みを前提としてたてられてきた近代学校のカリキュラムが、子どもの哲学によって組みかえられ、刷新されていく。
- * 教科という枠組みのなかでは封印されていた様々な問いや好奇心を解放するだけでなく、**子どもたちの心の闇を可視化**していく。
- * 心の闇の可視化が、アレントらの思想をふまえて千葉雅也のいう「**明るみの規範化**」、つまり「本当はそこまで言いたくない、黙っていたい、もうちょっと静かにしていたいというような気持ちを尊重してくれない」といった、ある種の全体主義に陥らない条件はどこにあるのか（『現代思想』2017年8月号「特集＝『コミュ障』の時代」）。

ジレンマから可能性へ

* 1 権力の関節を外す(中断、宙づりの教育学)

お茶大付属小の例(岡田 2018)岡山龍谷高校の例(中山
ほか 2018) 予測不可能な「想定外」の「出来事」

* 2 権力制度としての「学校」「大学」を引きこもりの場としての「アジール」「難民キャンプ」へと組みかえていく

小玉重夫「社会からひきこもり、思考する—ハンナ・アレント
が示唆したもの」『グラフィケーション』電子版17号(8月)

[https://www.fujixerox.co.jp/company/public/graphication/b
acknumber](https://www.fujixerox.co.jp/company/public/graphication/b
acknumber)

主要文献

- * 岩瀬優2018「学校において哲学対話が可能となる条件を考えるー教師の権力性をめぐる議論に着目してー」第4回哲学プラクティス連絡会口頭発表
- * 岡田泰孝2018「ともに考え続けよう(自由とは?)」『お茶の水女子大学附属小学校第80回教育実際指導研究会発表要綱』お茶の水女子大学附属小学校
- * 小玉重夫2013『学力幻想』筑摩書房
- * 小玉重夫2016『教育政治学を拓くー18歳選挙権の時代を見すえて』勁草書房
- * 中山昭・生徒代表2018「岡山龍谷高校」『ISN2.0第1回研究会』当日配布資料集